

直接話法と発話の忠実な再現

井 上 永 幸*

Nagayuki INOUE

Direct Speech and Its Faithful Reproduction of Utterance

1. はじめに

直接話法は一般に特定の話者の発話を可能な限り忠実に再現して伝達するための表現形式で、通例もとの発話者の発話を再現する「直接引用部 (direct quote)」と、その直接引用部が発話された際の発話者の状況を説明する「伝達部 (reporting clause)」とからなる。¹⁾ 伝達部は「伝達動詞 (reporting verb)」と呼ばれる動詞を含むことが多い。²⁾

(1) “I’m waiting for Ann,” he said.

(1)では“I’m waiting for Ann”が直接引用部、he saidが伝達部、saidが伝達動詞である。

本稿では、直接話法の役割である特定の発話を忠実に再現することとはそもそもどういうことかを確認した上で、その役割を果たすために、直接引用部や伝達部においてどの様な工夫が凝らされるかを具体的に検討していく。

2. 発話を忠実に再現する工夫

2.1 直接話法の役割

直接話法は、第三者の立場から特定の発話を伝達する間接話法としばしば比較される。その際、直接話法から間接話法へ、または間接話法から直接話法への書換えの可能性が、直接話法の派生過程も絡んでしばしば問題となるが、これらの書換えが無条件に許されるものではないことは明らかである。³⁾ Li (1986) は次のような例をあげ、(2)と(3)はsynonymousでも、(4)と(5)はsynonymousではないとしている。

(2) John said that this theorem was false.

(3) John said that this theorem was not true.

(4) John said, “This theorem is false.”

(5) John said, “This theorem is not true.”

間接話法では伝達者がもとの発話の‘this theorem was false’という「内容」さえ正確に伝達すればそれで伝達者の役割は終わるため、(2)と(3)はsynonymousとなるが、直接話法では伝達者がもとの話者の“‘This theorem is false.’”という発話そのものを忠実に再現することが必要となるため、(4)と(5)はsynonymousではなくなるわけである。⁴⁾ 以上のことから、直接話法においては、もとの発話と直接引用部は一字一句同じでなければならないということが、直接話法が成立する際の最低限の条件として挙げられる。⁵⁾

2.2 直接引用部

直接話法が成立するために最も重要な要素となるのが、直接引用部における語句の忠実な再現であることは2.1で述べたとおりだが、よりいっそうの忠実な再現を試みるためにさまざまな工夫が凝らされる。

話し言葉では伝達者が元の発話者の声の質や抑揚、社会的地位や地域的ななまり、発話時におけるしぐさや顔の表情などを直接引用部に反映させてもとの発話の再現を試みることが多い。また、書かれた直接話法を口頭で再現する場合も、こういった努力が行なわれるのが普通である。⁶⁾

(6) “It’s a wee bit expensive, so it is,” replied the Irish girl, with an air of disappointment. — Knowles (1987)

(7) John said, “I’m tired.” — Li (1986)

(6)では、直接引用部を再現しようとする場合、少なくともアイルランドなまり、失望を表すような語調といったことを考慮しなければ、正確な伝達にはならない。(7)では直接引用部を再現する声に疲労が表されるのが普通である。⁷⁾

* 島根大学教育学部英語科教育（英語学）研究室

書き言葉では書記上の工夫が凝らされることが多い。以下、具体例で検討してみる。

(8) Raising our arms, Harry and I joined together and counting loudly, “ONE, two, THREE, four,” we shambled across the floor. — *Reader’s Digest* [RD] (Dec. 1982)

(8)では、伝達部に“counting loudly”とあり、直接引用部全体が普通より大きな声で発せられたことがわかるが、さらに直接引用部の中で、ONEとTHREEの活字を大文字にすることによって、その部分がtwoとfourの部分より声高であったことを表し、リズムをとりながらダンスをしている状況をうまく再現している。

(9) Near the end of the Vietnam conflict, a group of Australian air-transport crews made short stopovers at the Don Muang Royal Thai Air Force Base at Bangkok, Thailand. A Thai cashier at the American Forces Base Exchange asked one of the Aussies how to say “Thank you” in Australian. He replied, “It’s the syme.”

She did not understand and asked again. This time he replied a little gruffly, “Syme syme.” Later, she proudly told⁸⁾ each Australian who visited the base exchange, “syme, syme and come again.” — *RD* (Oct. 1985)

(9)は、ベトナム戦争の終わり頃に、オーストラリア空軍兵の一団がバンコクにあるタイ王立空軍基地に立ち寄った際のエピソードである。米空軍基地両替所のタイ人のレジ係が、オーストラリア兵士にオーストラリア英語では“Thank you”のことを何と言うのかと尋ねると、その兵士は“It’s the syme.”と答える。レジ係は“syme”の部分が理解できなかったため、再び質問すると、“syme syme”とぶっきらぼうに答えられる。以後、そのレジ係はその両替所を訪れるオーストラリア兵士には“syme, syme and come again”とさも知ったらしく言っている、といった内容である。この話を面白くしているのは、言うまでもなくこのレジ係がオーストラリア英語では標準的な英語の/ei/という音が/ai/と発音されることを知らなかったということであるが、“syme”という標準英語にはない表記を用いることによって、オーストラリア人の話者の発話を忠実に再現し、伝達効果を上げている。

(10) “What kind of flower is that in your button-hole?” a fellow asked his friend.

“Why, that’s a chrysanthemum,” answered the friend.

“It looks like a rose to me.”

“No, you’re wrong. It’s a chrysanthemum,” insisted the friend.

“Spell it,” the fellow said.

“K-r-r-i-s-, no it’s K-h-r-r-y-, no it must be C-r-r-i-s-.... By golly, you’re right. It is [原文イタリック体] a rose.” — *RD* (Dec. 1982)

同書の“Laughter, the Best Medicine”からのものである。ある男が、正装の友人が折り襟のボタン穴に挿している花の種類を聞く。その友人はさも当たり前のように「キクだ」と答えるが、そぼ男は自分にはバラに見えるという。友人は「キク」だと言ってきかないが、その男に「綴りを言ってみろ」と言われてはたと困ってしまう。何度か綴りを言おうとするが、だめだとわかるとばつが悪そうに自分の非を認め、男の言うようにバラだと認めてしまうのである。バラと菊は簡単に見分けがつくはずであるので、本当は菊であったが、バラのroseに比べ極端に綴りの難しいキクのchrysanthemumを利用して、この男が意地悪な質問を仕掛けたものと思われる。本文中では、綴りを慎重に確認しながら言う様子が、“K-r-r-i-s-,” “K-h-r-r-y-,” “C-r-r-i-s-”のようにハイフンを使って表され、どうもうまく言えず困って言い淀む様子が“....”のようにピリオドを使って表されている。相手の意地悪な質問に屈して「あなたの言うとおり、確かにバラだわ」と答える場面では、“is”をイタリック体で示すことによって実際の発話ではそこに強勢が置かれ、「バラ」であることを強調していることを再現する働きをしている。

(11) Finally one day at the end of the class, Professor Robinson went⁹⁾ “wugga mugga mugga wugga wugga...” and everybody got excited! They were all talking to each other and discussing, so I figured he’d said something interesting, thank God! I wondered what it was?

I asked somebody, and they said, “We have to write a theme, and hand it in in four weeks.”

“A theme on what?”

“On what he’s been talking about all year.”

I was stuck. The only thing that I had heard during that entire term that I could remember was a moment when there came this upwelling, “muggawuggastreamofconsciousnessmuggawugga,” and phoom! [原文イタリック体] — it sank back into chaos.

This “stream of consciousness” reminded me of a problem my father had given to me many years

before. He said, “Suppose some Martians were to come down to earth, and Martians never slept, but instead were perpetually active. Suppose they didn’t have this crazy phenomenon that we have, called sleep. So they ask you the question: ‘How does it *feel* [原文イタリック体] to go to sleep? What *happens* [原文イタリック体] when you go to sleep? Do your thoughts suddenly stop, or do they move less *aanndd lleessss rraaaaappppiidddd-lllllllyyyyyyyyyyy*? How does the mind actually turn off?” — Feynman, “*Surely You’re Joking, Mr. Feynman!*”

ノーベル物理学賞授賞者のリチャード・ファインマン氏の自伝的エッセーの一節である。氏がMITの学生だった頃、人文系科目の中からやむを得ず選択したもののひとつである哲学の講座に関するエピソードである。

最後の授業の日に、髭づらでかなり年輩のロビンソン教授が例によって小さな声でぶつぶつ何か言うと、今まで隣り近所で話をしていた学生達が急に騒ぎだす。何か面白いことでも言ったのだろうと辺りの者に聞くと、4週間後にこれまで1年間しゃべってきたことについてレポートを出せと言う。これまでの授業で思い出せることといえば、「ぶつぶつぶつ意識の流れぶつぶつ」というのを小耳にはさんだときくらいのものである氏は二の句が継げなかった。

氏は、この「意識の流れ」という言葉で何年も前父が言っていたことを思い出す。眠る習慣のない火星人が地球にやって来て、人間の「眠りにつく」という行為について、眠りにつくとはどういった感じなのか、眠りにつくときに何が起るのか、思考は突然に停止するのかあるいはだんだんと速さが低下するのか、実際には意識はどのようになくなるのかなど、いろいろと質問をするのである。

(1)では、ロビンソン教授の小さな聞き取りにくい声での話ぶりを、実際に聞いていたときの印象で“wugga mugga mugga wugga wugga...”, “muggawugga streamofconsciousnessmuggawugga” などのように擬声語を交えて表現し、また、「思考はだんだんと速さが低下するのか」と火星人が質問する部分では、“...do they move less aanndd lleessss rraaaaappppiidddd-lllllllyyyyyyyyyyy?”のように、単語をだんだんと長く延ばして発音し、¹⁰⁾ 徐々に思考の速度が低下するのを模した発話の様子を再現している。

このように直接引用部においては、もとの発話を可能な限り忠実に再現して伝達するために、話し言葉である

うと書き言葉であろうと、それぞれの伝達手段の条件に即した方法で様々な工夫が凝らされているのである。

2.3 伝達部

特定の発話を忠実に再現するために、直接引用部の中でいろいろな工夫が凝らされていることは2.2で検討したが、直接引用部だけでは十分な再現ができないことが多い。特に書き言葉では、話し言葉では再現可能な発話の特性が再現不可能な場合があるなど、伝達手段の制限が多くなる。

直接引用部を忠実に再現する工夫として最も手軽な方法は、伝達部に直接引用部が発話された際の状況を説明させることである。統語的には「主語(話者) + 伝達動詞」の型がその原型であるが、様々な変異形がみられる。¹¹⁾

2.3.1 伝達部に現れる動詞の多様性

直接話法伝達部に現れる動詞は、話し言葉ではsay, askなど一部の動詞に限られるが、書き言葉ではいわゆる「伝達」の機能を持つ動詞にとどまらず、発話時の状況や、発話者の意図を表明するもの、聞き手に対する働きかけを表すもの、一連の談話を連結するものなど、その種類は多岐にわたる。以下、伝達部に現れる動詞を機能別に分類し、共起する副詞類にも注意を払いながら、適宜その問題点を検討してみる。¹²⁾

a. 情報伝達

ここに分類された動詞は、直接話法引用部の情報伝達の機能に最も重点が置かれる。直接話法伝達部の持つ機能を‘say + a’¹³⁾とすると、‘a’の要素は以下で述べるb.~e.のものに比べて最も少ない。

(i) 伝達: announce, go, hear, inform, observe, relate, remark, report, say, state, tell, utter, etc.

(i)に属する動詞は伝達動詞の中では最も頻度が多い。sayなどの実例は2.2でも扱っているのでここでは省略するが、これらのうちhearは、主語が一見直接引用部の話者ではないように思われるので注意が必要である。

(12) 【禁煙に関して】 One often *hears*, “I’ve tried to quit, God knows how many times,” or “We all have to die of something,” or “I don’t want to gain weight.” — RD (May, 1983)

上の例の“*One often hears*”は機能的に“*People often say*”に近く、結果として伝達部の主語は直接引用部の話者を表すことになる。

(ii) 指示伝達: describe R, put R, say about [of] R, talk about R, etc. (Rは指示語などのことが多い)

ここに属するものは、直接引用部の内容が特定の分野に関することで、いきなり直接引用部を導入しては理解が困難であったり誤解を生じる恐れがあるため、直接話法を導入する前に具体的に説明を加えて読者に予備知識を与える役割を果たす。直接引用部を忠実に再現することに加えて、正確にその内容を読み手に理解させるための手段である。

- (13) To many people, self-hypnosis sounds impossible — but only because their view of hypnosis is incorrect. They think of hypnosis as a process in which a hypnotist, using special skills and powers, forces his subject to fall into a sleep-like trance and to become obedient to his commands. Actually, you have to be willing to enter the trance — it can't be forced on you. As hypnosis researcher Dr. Herbert Spiegel of Columbia University's College of Physicians and Surgeons *put it*, "Hypnosis isn't something a hypnotist does to you. You do it to yourself." — RD (April 1984)

多くの人にとって自己催眠が不可能なもののように思えるのは、その人たちの催眠術に対する見方が不正確であるからに他ならない。コロビア大学医学部で催眠術を研究しているハーバート・シュピーゲル博士は「催眠術というのは催眠術師がするものではない。自分で行うものなのだ。」と語っている、といった内容である。直接引用部の部分だけでは分かり難いので、そのまえにその発話者がなぜそういった発言に至るようになったかを、具体例をもって解説し、その内容を“it”で受けて、直接引用部を導入し、直接引用部を誤解のないように伝達する工夫をしているわけである。

(iii) 主張・断定: accuse, affirm, argue, assert, assure, claim, conclude, declare, insist, proclaim, pronounce, etc.

ここに属する動詞は、もとの発話者の強い主張や断定を表す。直接引用部の内容も、強い語調となっているのが普通である。

実例は(10)の後半部分にある *insist* を参照。キクだと分かっているながら、むりやりバラだと言わせようとしている相手に対して、発話者ががんとして譲らない態度をとっていることを伝達部が明確にしている。

(iv) 告白・説明: admit, complain, comment, concede, confess, confide, disclose, explain, reveal, show, etc.

(iv)に属する動詞は、これまで聞き手の知識になかったものを話者である伝達者が与える、または聞き手が既に持っている知識を確認するという機能を持っている。

- (14) 'Why do we want to go to some goddam political dinner?!' Allen demanded, as they changed in the locker-room for their squash game.

Freddie zipped up the front of his purple track-suit and patted his stomach comfortingly. 'Because the President will be speaking there, that's why,' he *explained*, picking up his half-smoked cigar off the radiator.

Allen dragged himself out of his tight jeans. 'The president of what?'

Freddie rested his small head against the metal door of the locker and gently banged it. 'The President of the United States!'

Allen pulled on some snazzy silk shorts. 'No kidding?' — Don, *Splash*

兄弟で生鮮食料品の卸を経営しているフレディー(兄)とアレン(弟)の会話である。二人でスカッシュラケットを終えて、着替えのときにアレンが「なんでそんな政治家のパーティーなんぞに行かなくちゃいけないんだい」と詰めよると、フレディーが「なんでって、プレジデントがそこで演説することになってるからさ」と説明する。プレジデントをどこかの社長と勘違いしたアレンが「どこのプレジデントだって?」と聞き返すと、フレディーが「合衆国大統領のことさ」と答え、アレンが「冗談だろ」と言う、といった内容である。なぜそんな場所に行こうとしているのか見当がつかないアレンに、フレディーが説明をしてやっている状況が描かれている。

(v) 応答: acknowledge, answer, reply, respond, return, whisper back, etc.

これらの動詞は、話者がだれかの質問や語りかけに答えるときに用いられる。文脈によっては、(35)(cf. 2.3.2)のように必ずしも動詞ではなく名詞表現が用いられることもある。

- (15) An elderly farmer was brought into the hospital because he appeared confused and was thought to have had a stroke. Attempting to assess his mental status, the emergency-room physician asked, "If you have a hundred sheep in a pasture and seven escape, how many will be left?"

“Zero,” *replied* the farmer.

“No, the answer is ninety-three,” said the doctor.

“Fella,” the farmer quipped acerbically, “you don’t know nothin’ about sheep. When one of them dumb critters decides to go, they *all* [原文イタリック体] go.” — *RD* (June 1987)

同書の“Laughter, the Best Medicine”からのものである。年輩の農夫が、混乱状態で発作を起こしていたと思われるので病院に運ばれた。彼の精神状態を調べようと、救急処置室の医者が、「牧場に百頭の羊がいて、七頭が逃げると、残りは何頭か」と尋ねた。農夫は「ゼロだ」と答えるが、医者は「ちがう、答えは九十三頭だ」と言う。「君い」農夫は鋭く切り返して、「羊のことを何にも知らないんだねえ。奴らは馬鹿だから、群れのうちの一头が行けば、みーんな行っちゃうんだよ」と言うのである。医者の質問に対して、農夫が返答する際にreplyが用いられている。

(vi) 思考・記憶：believe, brood, muse, recall, recollect, reflect, remember, speculate, surmise, think, wonder, etc.

上に挙げた動詞は、実際に音声として発話されたものではなく、発話者の頭の中で行われた思考の過程を通常の発話形式で表したものである。Leech (1980: 122) では、このような思考動詞を用いた直接話法と演劇の独白 (soliloquy) との類似性を指摘している。また、Leech *et al.* (1982: 165) などでは、直接話法の“direct speech”に対して“direct thought”と呼んでいる。

(16) “No one who has ever known me can believe what I did.” [原文イタリック体]

He is 35, with sandy hair, blue eyes and an aw-shucks grin. There is disbelief in his voice as he tells of beating the wife he loved, choking her unconscious, and, at other times, pushing her face in the mud and holding a kitchen knife to her throat. His voice cracks as he remembers the young children he adores looking on in terror.

“How could I *do* [原文イタリック体] that?” he wonders now. “People know me as a good man. I own my business. I don’t drink, I don’t smoke, I don’t chase after other women.” — *RD* (Mar. 1986)

妻に対する虐待という社会問題を取り上げている。自分でちゃんとした事業をやっており、酒やタバコもやら

ず、真面目人間で通っている彼が、「なぜあんなことができたんだろう」と自らに問いかけている。wonderを使うことによって、今になってみると自分のような男がどうして妻を虐待などしたのだろうかという納得のいかない気持ちが伝わってくるのである。

(vii) 未来拘束：predict, promise, swear, vow, etc.

上に挙げた動詞はいわゆる遂行動詞 (performative verb) と呼ばれるものに属し、直接話法においては、話者の未来を拘束するような力を持つ。promiseなど一部の動詞では、直接引用部内の文の主語は通例 I となる。

(17) After the reception David and Debbie drove to their new mobile home. At the threshold David looked at his arms. “Someday I’ll carry you across these steps,” he *promised*. — *RD* (Dec. 1982)

事故で両腕が不自由になったデイヴィッドが、デビーとの結婚披露宴の後、新居であるモービル・ホーム (トレーラー式の移動住宅) にやって来た。入り口のところでデイヴィッドが自分の不自由な両腕を見て、「いつかこの階段を君を抱いてのぼってやる」と約束するのである。単にsaidを使わずにpromisedにすることによって、デイヴィッドの決意のほどと語気の強さが伝わってくるのである。

(viii) 特定の原文の再現：count, croon, quote, read, recite, sign, sing, etc.

数字、特定の文章の一節や歌詞など、だれがいつ伝達しても同一の内容を再現できると期待できるような場合に用いられる。

(8)にあるcountの例を参照。特別な数え方をしない限り、数はだれが数えても同じである。そのような特定の法則や原文に従って再現することを明示する。もしcountの代わりにsayが用いられれば、直接引用部の内容は必ずしも数え上げている数字ではなく、単なる無意味な音の羅列にもなり得るのである。¹⁴⁾

b. 発話時の状況描写

ここでは、伝達部が直接引用部が発話されたときの話者の状況を描写する機能を持つ場合を取り上げる。

(i) 音声描写：¹⁵⁾ babble, bark, bellow, bleat, blubber, boom, breathe, burstout, buzz, call (out), choke, etc.

伝達部において、直接引用部が発話される際の伝達者の音声を描写する動詞は伝達部に現れる動詞のグループの中では最も多彩である。書き手が直接引用部を忠実に

再現するために用いる状況描写の手段としては、最も基本的なものであるからであろう。

- (18) Stunned by the beauty of their new secretary, two executives resolved to make her adjustment to the firm their personal business. "It's up to us to teach her the difference between right and wrong," said the first.

"Agreed," *exclaimed* the second, excitedly.

"You teach her what's right." — *RD* (Nov. 1986)

同書の「Laughter, the Best Medicine」からのものである。新入りの美人秘書にぼう然となった二人の重役が、彼女を自分たちの会社に慣れさせるのは自分たちの仕事だと決め込む。「この善悪を彼女に教え込むことはおれたち次第だからな」と一人がいうと、「賛成だ、君は正しいほうを教えてやれよ」と、もう一人が興奮ぎみに声を荒くするのである。「excitedly」とも相まって、「exclaim」が話者のやる気まんまんの気持ちを生き生きと伝えている。世の中の面白いことの中には、悪いことのほうが多いのかも知れない。

また、音声を描写する際用いられるのは語用論的に話者に重点をおいた「主語（話者）＋動詞」の型だけでなく、(19)のように話者の声の質を中心とした描写として表現されることもある。

- (19) "Hullo!" she growled.

"Hullo," *came the masculine voice she'd been trying her hardest to forget*. Tears burned her eyes again. Her heart slammed against her chest. She covered her eyes with one hand and leaned her forehead against the cool glass of the sliding door in the dark. — Spencer, *Spring Fancy*

電話のベルに起こされた彼女は「もしもし」と怒鳴るように電話にでると、「もしもし」という忘れようとしても忘れられない男の声がしてきた。受話器を取り上げてみると、相手は以前の恋人であったという場面である。形の上では発話者の声の描写にすぎないが、文脈の展開においては、彼女の心理状態の変化を描く上で重要な機能を果たしている。

- (ii) 書面：editorialize, mark, write, etc.

直接引用部が書かれたものである場合、その旨を伝達部で断る場合に用いる。

- (20) *Political bullying*. [原文イタリック体]

Another reason why the Soviets flaunt their presence is to force acceptance of their right to

cruise in Scandinavian waters at will. Norwegians and Swedes could eventually conclude that resistance is futile. Such tactics fit the strategic doctrine of Admiral of the Fleet Sergei Gorshkov, a Soviet deputy defense minister. The navy can, Gorshkov *writes*, "achieve political ends without resorting to armed struggle merely by threatening to start military operations." — *RD* (April 1984)

スカンジナビア半島の諸国が、ソビエトの示威行動に打ち勝てず、結局はソビエトの思うままになっていることが述べられている。最後の部分で、ゴルシュコフが、海軍は「軍事行動を起こすという脅威を与えることのみで、武力闘争に訴えることなく政治的な目的を達成することができる」と書いている部分が引用されている。主語の部分は引用符に含まれてはいないので、実際の前稿では別の表現が行われていたことを暗示している。書き言葉を引用する場合は、2.1で述べた「直接引用部は一字一句同じでなければならない」という条件は忠実に守られることになる。

- (iii) 動作：direct, gaze, glance, leer, look (up), nod, point, regard, rise, shrug, shudder, supply, etc.

もとの発話者が直接引用部を発話する際にとった動作を描写する際に用いられる。

- (21) "We're getting to you!" Bailey heard a man call, and then he felt a blast of fresh air. Hands reached down, but he was still wedged too tightly to be pulled free. The forklifts growled to life and the weight lifted, the awful pressure on him suddenly gone. As the slab slowly rose, Bailey saw a woman who had been pinned next to him sit straight up and thought she was another survivor — until he saw why she had moved. "The woman was dead; her face was just glued to that concrete," he *shudders*. "It was then I knew how lucky Shelley and I were to be alive." — *RD* (Sept. 1982)

米国Kansas Cityのホテルで起こった、渡り廊下の崩壊事故での救出の様様を描いている。崩れた渡り廊下の下敷きになっていたベイリーは、「さあもう大丈夫」という救出隊員の声を聞くと同時に、新鮮な空気が入り込んでくるのを感じた。両手は届いたが、体はまだしっかりと挟まれていて、引きずり出してもらうことはできなかった。厚い板が取り除かれ、今までベイリーの隣りで

同じように押さえつけられていた女性がちゃんと座るのが見えたので、彼はもうひとり生存者がいたのだと思った。しかしなぜ彼女が動いたのかがやっとわかった。「その女性は死んでいたんです。顔がそのコンクリートにぴったりとくっついていたんですよ。そのときは本当にシェリーと私が生きているなんて幸運だったと思いましたよ。」とベイリーが震えながら語るのである。shudderを使うことによって、当時の様子を振り返るベイリーの恐怖心に満ちた話し方が伝わってくるのである。

(iv) 表情: beam, bristle, frown, grin, pout, simper, smile, sneer, etc.

もとの発話者が直接引用部を発話する際にとった顔の表情を描写する際に用いられる。

(22) Freddie tapped his forehead. 'What's with Mrs Stimler?' he asked?

'Oh, she had a little accident over the weekend. Got hit in the head by some lightning.'

Freddie's huge body shook with stifled laughter.

'Hey, Freddie, that's not funny,' Allen frowned.

'I'm sorry, Allen. That's not funny.' — Don, *Splash*

死んだはずの父親から電話があったのだ、おかしなことばかり言う秘書をめぐっての会話である。フレディが秘書のスティムラー女史はどうかしたのかと聞く。週末に雷に頭を打たれたのだとアレンが言うと、フレディは大きな体を揺らせながら息を殺して笑う。そこで、アレンが「おい、フレディ、笑い事じゃないぞ」と言って、顔をしかめるのである。frownを使うことによって、アレンの当惑の気持ちのこもった発話が再現されている。

(v) 間合い: blurt (out), chant, chorus, echo, repeat, etc.

もとの発話者が直接引用部を発話する際に、どのような間合いのとり方をしたかを描写するとき用いられる。

(23) "So, when's your big day?" he asked.

"Only three months away. The third Saturday in June."

"Ah, a June wedding, no less."

"Yes, we've had the date picked out for almost a year."

"You and —?"

"Paul Hildebrandt."

"Paul Hildebrandt," he repeated thoughtfully, then filled his mouth with potato salad. When he'd swallowed, he studied her askance. "So, what's he like?" — Spencer, *Spring Fancy*

結婚を控えた女性が、友人の結婚式を通じて知り合ったある男性と、お祝いのパーティーの席での会話である。彼女が質問に答えて自分の結婚式の日取りを教えると、彼は今度は彼女の結婚相手の男性の名前を聞いてくる。彼女が答えると、彼女に関心を抱き始めているその男性は、彼女の結婚相手の男性の名前をもの思いに耽ったように繰り返す、さらにその男性のことを知りたがるのである。彼が"Paul Hildebrandt"と言ったときの彼の様子や心理状況が、repeatを用いることによって浮き彫りにされ、thoughtfullyの持つ意味が生きてくるのである。

c. 話者の意図

ここに属する動詞は、直接引用部で述べられている内容が、その場面においてどのような語用論的意味を持つのかを説明する機能を持つ。

(i) 同意・弁護: accept, acknowledge, admit, agree, approve, capitulate, confirm, defend, give in, grant, etc.

もとの発話者が直接引用部の中で、他の発話者の発話内容に同意したり、それを弁護したりする内容のことを述べている場合に用いられる。

(24) "Elmer, why don't you play golf with Ted anymore?" asked a friend.

"Would you play golf with a fellow who moved the ball with his foot when you weren't watching?" Elmer asked.

"Well, no," admitted the friend.

"Neither will Ted," replied Elmer. — RD (Dec. 1982)

同書の"Laughter, the Best Medicine"からのものである。一人の友人が、「エルマー、なんでテッドともうゴルフをしないんだい」と聞くと、エルマーが、「人が見えないときに足でボールを動かすような奴とゴルフをするかい?」と言う。するとその友人は、「そうだね、やらない」とエルマーの言うことを認める。エルマーは「テッドもやらないだろうよ」と応酬する。読者は前半部分で、そういう事情があるのなら当然のことだということでエルマーの言い分を認めるのである。admitを用いることによって、登場人物の友人や読者の心をエルマーの側に引きつけておいてこそ、実はインチキをしているのはエ

ルマーのほうだったという最後の落ちが生きてくるのである。

(ii) 反論・修正: amend, come back, correct, counter, deny, disagree, object, refuse, refute, retort, return, etc.

もとの発話者が直接引用部の中で、他の発話者の発話内容に反論したり、または特定の発話の内容を修正したりする場合に用いる。

(25) “Mom! You in the kitchen?”

“In the kitchen,” she called back. She folded her arms as she held Neil’s eyes.

“Me and Todd want to know ——”

“Todd and I,” Lacey *corrected* automatically as Scott strolled through the kitchen door. She watched Neil’s face closely as he got his first look at the boy. She estimated it took about three seconds for the realization to clobber him over the head.

“Todd and I want to know can we sleep outside in the tent tonight, and can Danny and Brian come, too? Their mom says okay if you do. Hello.” The last word was directed with a dimpled grin at Neil.

—— Turner, *For Now, For Always*

レイシーが自分に子供がいることを知らないニールと台所で話をしているときに、子供が帰ってくる。子供が友達と外のテントで今晚寝てもいいかと母親の許可をとろうとするが、自分と自分の友人のことを“Me and Todd”と言っているのを、母親のレイシーが“Todd and I”というふうは無意識のうちに訂正してさえざる場面である。correctは直接引用部の内容を修正するのではなく、他の話者が直前に言った内容を修正することに注意。

(iii) 感情: bemoan, blaze, commiserate, enthuse, flare, fume, lament, marvel, rage, relent, etc.

もとの発話者が直接引用部を発話する際に、どのような感情の状態に陥ったかを描写する機能を持つ。

(26) They argued more during the following week than in all the time they’d known each other.

Monday it was over the state of the house when lacey got home from work.

“It looks like a pigsty,” she *fumed* as she stalked around the family room. “What did you do, spend the whole day seeing how big a mess

you could make in this one room?”

—— *ibid.*

仕事から帰ってみると、家の中がめちゃくちゃになっているので、子供の面倒を見ていたニールに苦情を言っている場面である。“as she stalked around the family room”の部分と相まって、fumeを使うことによって、レイシーのいらだちようがありありと伝わってくるのである。

(iv) 態度: apologize, boast, brag, broadcast, decide, dramatize, elaborate, etc.

もとの発話者が直接引用部を発話する際に、どのような態度をとっていたかを描写する機能を持つ。

(27) Then suddenly the motor hesitated, coughed several times and then died completely.

Immediately Allen became tense and anxious all over again. ‘What’s wrong, Fat Jack? What’s the matter with it?’

Fat Jack shook his head in disgust and pulled the starter cord a few times. But the engine refused to start. ‘Guess when I rocked her I got a little water in the engine...’ he speculated, picking a hammer out of the bottom of the boat between his filthy feet. ‘I can fix it, son. I’m mechanical,’ he *boasted* complacently. —— Don, *Splash*

アレンがふとつちよの操縦するボートに乗っていると、ふとつちよがふざけてボートを揺らしたため、エンジンの中に水が入ってボートが動かなくなってしまう。そんなとき、ふとつちよは底のほうからハンマーを取り出して、「直せるさ、若い。機械には強いんだ。」と悦に入って自慢するのである。complacentlyが、ふとつちよが事態の重大さを把握していないことを示していると同時に、boastが、そういった状況からは容易に抜け出せそうにないことを暗示し、ふとつちよの自慢する言葉を不用意に受け取ってはられないことを表している。

d. 働きかけ

d.に属する動詞は、聞き手に何らかの形で働きかけを行う機能、いわゆる「発話の力 (illocutionary force)」を持つ動詞である。

(i) 要請・勧誘: admonish, advise, beg, command, demand, encourage, plead, propose, suggest, urge, warn, etc.

上に挙げた動詞は、直接引用部が話し相手に何かを要

請したり勧誘したりしていることを表す機能を持っている。

(28) Freddie glanced down at the desk critically.

'You should clear up your desk. It always looks like a pigsty in here,' he *advised*

'No problem, Freddie. Don't touch the desk.'

— Don, *Splasc*

フレディーが何か言いたそうに机をちらっと見て、「机を整理したらどうだ。ここはいつも豚小屋みたいじゃないか」と注意すると、アレンが、「いいんだ、フレディー。机には触らないでくれ」と言う。advisedは、フレディーが話し相手であるアレンに何か行動を起こすように求めたことを表すが、ここではそれが不発に終わっている。

(ii) 質問: ask, challenge, demand, inquire, question, want to know, etc.

これらの動詞は、直接引用部が聞き手に対して何らかの回答や反応を期待していることを表す機能を持っている。

(29) A group of salesmen, stranded in a motel during a bad snow and ice storm, wondered impatiently when they could get back on the road to make some calls. They grilled everyone who came into the motel in the morning, asking whether the roads were clear enough to get about and make some sales. They asked one wise fellow, who took a minute to answer.

"Well, that depends," he said, having looked over the assembly.

"Depends on what?" the salesmen *wanted to know*.

"Depends on whether you're working on salary or commission." — RD (March 1986)

セールスマンの一団が、冬の悪天候のためモーテル(自動車旅行者用ホテル)で立ち住生し、いつになったら道路へ戻って電話をかけられるのかとやきもきしていた。彼らは午前中にモーテルにやってきた連中みんなに詰めよって、道路は動き回ったり商売ができるほどきれいに雪かきされているのかと聞いた。彼らが一人の利口者に聞くと、彼は少しして答えた。「それができるかどうかは」と、彼はみんなを見渡して言った。「それができるかどうかは何なんだい」と、セールスマンたちは知りたがった。その利口者は、「それができるかどうかは、君たちが月給制なのか歩合給制なのかによるよ」と、したたかに答えるのである。want to knowを用いることによって、単に

情報を求める内容の直接引用部に話者の焦る気持ちを映し出し、伝達が効果的に行われている。

e. 談話連結

e.に属する動詞は、これらを含む直接話法伝達部の「談話連結詞 (discourse connective)」としての機能が最も顕著に現れる動詞群である。談話と談話を連結し、その進行過程を明確にする働きがある。¹⁶⁾

(i) 開始・追加: add, begin, resume, start up, tack on, start to say, etc.

新しく直接引用部を始めたり、すでに行われた引用部分に新しく引用を追加することを明示する働きがある。

(30) "Thank you," she managed almost formally and could have bitten her lip. This was ridiculous. She was no tongue-tied teenybopper unable to deal with awkward situations. Unconsciously her chin lifted and she met Torr's eyes with a grim boldness. "About last night," she *began* sternly.

"I have a suggestion to make about last night,"

Torr interrupted calmly, reseating himself. "I suggest we don't discuss it this morning." —

Krentz, *Uneasy Alliance*

夫婦喧嘩の翌朝、妻が夫に昨夜のことについて話を持ちかける場面である。「ゆうべのことだけど」と、妻が厳しい口調で始めるのである。すると夫のほうで、「ゆうべのことで言いたいことがあるんだ」と、座りなおしながら穏やかに妻をさえぎって、「今朝はもうそのことは言わないことにしよう」と続ける。beginを用いることによって、そこから新しい話題に移るということを示し、読者にその心づもりをさせる効果があると同時に、その話題の提供者を明示する働きがある。

(ii) 継続: blast on, continue, go on, stumble on, etc.

すでに直接話法で伝達された内容に引に続いて、同じ発話者による発話が伝達されることを明示する働きを持つ。

(31) "This is a very special coffeecake," he explained. "I accidentally drove by the bakery this morning and there in the window were a host of goodies. I felt this was no accident, so I prayed, 'Lord, if you want me to have one of those delicious coffeecakes, let me have a parking place directly in front of the bakery.'

"And sure enough," he *continued*, "the eighth

time around the block, there it was!" — RD
(April 1984)

少々太りぎみの同僚が、ダイエットを始めた。好きなケーキ屋の前を通らないように、通勤のコースを変えたりもした。それがある日、彼が大きなコーヒケーキを持って仕事場へやってきた。我々はみんな彼のことを叱ったが、彼は無邪気に、にこにこしたままだった。

彼の説明によると、それは特別なコーヒケーキで、今朝偶然そのケーキ屋の前を通りかかると、ウインドのところにとくさんのお菓子があつた。これは偶然ではないと思ひ、そのケーキ屋のまん前に駐車できるスペースがありますよにと祈つたというのだ。「そうしたら、案の定、その区画を8回ほどまわつたときに、そこにあつたのき」と、彼は続けるのである。continueは単にその発話者の発話が續くことを示すだけではなく、その発話者が発話に夢中になつてゐることを伝える働きを持つてゐる。コーヒケーキが食べたいばかりに、神様まで持ち出して、自分がコーヒケーキを買つてきた言ひ訳に一生懸命であることが読んでゐる者に伝わつてくる。

(iii) 介入: break in, but in, chime in, cut in, interject, interpose, interrupt, put in, etc.

すでに順調に行われつつある談話の流れの中に、別の発話者が介入することを明示する働きがある。

实例は(30)を参照。妻が昨夜の夫婦喧嘩の話題を持ち出そうとしたところで、夫が割り込んで発話を始めている。このような手法を取ることによつて、「私にはもつとよい考へがある」とか「こちらのほうかもつと重要だ」といつた発話者の心理状態までも読者に伝えることができるのである。

(iv) 終了: end (up), finish, pause, stop, etc.

一連の発話が終了した、あるいは一時的に終了したことを明示する働きがある。

(32) Allen grinned wryly, as though he had been putting off broaching the subject himself for a considerable time. 'Well, here's the thing,' he mumbled. 'I was goin' to find you a hotel.'

She looked at him blankly.

'But then...' he stumbled on, 'then I figured that after this afternoon... well, I mean I just kind of assumed that we'd...' He fell silent and gazed helplessly into her blue eyes. 'Well, would you mind coming and staying with me?' he ended up weakly. — Don, *Splash*

アレンが、その女性を人魚とは知らずに自分の家に誘う場面である。泊まるとこがないその女性に、自分からそういった話題を持ち出すのをためらつてゐたかのように、自分がホテルを探してやるということをどうにか告げると、人間の世界のことなど何も知らないその女性はぼかんと彼を見ているばかり。さらに、彼は言い難そうに、「でもそれから…、それから昼すぎに…、いや、ちょっと思つただけつていうことさ…」と続ける。しかしまた黙り込んでしまつて、ついに思い切つて、「あの…、ぼくのところへ来て泊まるつていうのはどうかかな」と、小さな声ではあるが言い終わるのである。end upを用いることによつて、その直接引用部の内容が、その発話者が本来言いたかつたことであり、それをやつと今言い終えたという発話者の心情を伝えるとともに、読者には、その発話に対する登場人物の反応を次の文脈に期待させる働きがある。

以上、直接話法の伝達部に現れる動詞について、共起している副詞にも注意を払いながら、直接引用部だけでは不十分な伝達効果をどのように補つてゐるのかを検討してみた。上に挙げた動詞のすべてが直接話法の伝達部に無条件で生起可能なわけではないが、¹⁷⁾ 伝達部に現われ得る動詞の多様性は十分うかがひ知ることができるといふことができる。¹⁸⁾

2. 3. 2 副詞類その他

2.3.1でもふれたように、伝達部に動詞とともに現れる副詞類も、直接引用部を忠実に再現するために大きな役割を果たしている。動詞だけでは発話時の状況が十分に再現できない場合は、しばしば伝達部に様態の副詞類が用いられる。しかし、文脈から明かな場合は単に副詞類だけで伝達部が構成されることもある。¹⁹⁾

(33) Lacey looked up from the sofa, where she was removing her shoes. "You can't sit tonight?"

"No, I'm afraid not. Remember, I told you last week that my niece and her husband were going to be in town, and I'd asked them to dinner."

"Oh, no I forgot," Lacey sighed. Then, in resignation, "Well, I guess I'll just stay home."

— Turner, *For Now, For Always*

姪とその夫が町に来ることになつており、食事に招待するので今夜はゆつくりできないという来客の言葉に、レイシーは、「ああ、そう、忘れてたわ」と、ため息まじりに言う。それから諦めたように、「じゃあ、家でおとなしくしてることにするわ」と言うのである。in resig-

nationが、彼女の落胆の様子がその発話ににじみ出ていたことを生々しく伝えるのである。

こういった副詞類のみによる伝達部構成は戯曲形式の文体にも通ずるところがある。

(34) MOZART: The story is really amusing, Majesty. The whole plot is set in a —— [*He giggles* (原文イタリック体)] —— in a...

JOSEPH: [*Eagerly* (原文イタリック体)] .

Where? Where is it set?

MOZART: It's —— it's rather saucy, Majesty! —— Pater Shaffer, *Amadeus*

モーツァルトが国王ジョーゼフに現在制作中のオペラについて説明をしている場面である。モーツァルトが、「物語はいたって愉快なものですよ、陛下。筋全体の設定は [くすくす笑う]、設定はですね…」と言うと、ジョーゼフは「どこだ? 設定はどこなんだ?」と熱心に聞いてくるのである。モーツァルトの思わせぶりな態度に、いらいらしながら聞き返すジョーゼフの様子を [*Eagerly*] によってうまく再現しているのである。なお、 [*He giggles*] も直接話法伝達部と機能的には同じものである。

最後に、統語的にはいわゆる「主語+伝達動詞+直接引用部」の構造ではないが、発話者よりもその発話のみに注目させて、そのときの状況を少しでも忠実に再現しようという試みがなされた例を紹介する。

(35) The notorious cheapskate finally decided to have a party. Explaining to a friend how to find his apartment, he said, “Come up to 5M and ring the doorbell with your elbow. When the door opens, push with your foot.”

“Why use my elbow and foot?”

“Well, gosh,” *was the reply*, “you’re not coming empty-handed, are you?” —— RD (April 1987)

しみつたれで有名な奴がとうとうパーティーをすることにした。自分のアパートに来る方法がある友人に説明するときに、「5Mの部屋のところまで来たら、ひじでドアの呼び鈴を押してくれ。ドアが開いたら、足で押してくれ。」と言う。その友人が「何でひじと足を使うんだい」と聞くと、その答は、「えっ、だって、手ぶらじゃ来ないだろうからね」であった。アパートへの道順だけでなく、部屋の前まで来た後のドアの開け締めに関してまで指示されると、読者はなぜそんなことまで説明する必要があるのかと疑問に思い緊張するが、最後の言葉でそのしみつたれの奴のしたたかさに笑いを誘われることになる。ここでは、発話者は文脈から当然明かであり、まし

てや、なぜひじと足を使うのかという疑問に焦点が当てられているため、*he replied*ではなく、いっそう直接引用部が引き立つ*was the reply*が用いられている。これによってその場面での緊張したやりとりがより効果的に再現されるのである。因みに、ここでは伝達部が直接引用部の中に挿入されているため、後半部分を期待する読者の緊張を高める働きをしている。²⁰⁾

3. おわりに

本稿では、直接話法が用いられる際、直接話法の要である直接引用部とそれを補助する伝達部において、もとの発話を忠実に再現するためにどのような工夫が凝らされているかを、限られた例ではあるが実例を通して検討してきた。ある特定の話者の発話をできる限り忠実に伝えようとするのが直接話法であることを最初に述べたが、そのためには、直接引用部に音声上または書記上の工夫を凝らす方法もあるが、直接引用部の性質上、必要以上に加工することは許されない。また、その発話を忠実に再現しようとするれば、伝達部が発話時の話者のおかれた状況の描写に発展していくのは自然で、いきおい伝達部の役割が大きくなるのである。書き言葉においては特に伝達部の様相は多種多様で、従来のように「直接話法の伝達部に現れる動詞=伝達動詞」といったような図式では捉えきれないのはこれまで見てきた通りである。こういった様々な種類の伝達部と、それらの文中における生起位置との関係も含めて、語用論の立場から再検討する必要があることを指摘して本稿を終えることにする。

注

- 1) 小説などでは伝達部はしばしば省略される。cf.井上 (1985)
- 2) 直接話法の伝達部には伝達動詞が含まれていることが当然のこのように論じられることが多いが、小説などでは伝達動詞のない伝達部も少なくない (cf. 井上, 1986 b)。
- 3) 詳しくは岡田 (1982) を参照。
- 4) Li (1986) は直接話法と間接話法は証拠立て (evidentials) の形態の違いであるとし、直接話法のほうが忠実度が高いので証拠立ての信頼性が高いことを指摘している。また、Chafe (1982) は直接話法を用いるということは伝達者がその伝達事項に熟

中していることを表すとしている。

- 5) Davidson (1979) に直接引用部に関する綿密な検討がみられる。
- 6) 俳優さながらのこのような直接話法の性質を Wierzbicka (1974) は“theatrical feature”と呼んでいる。
- 7) 間接話法を用いた
(i) John said (that) he was tired.
のような文では内容だけが問題となる。もし(i)をいろいろな感情やしぐさ、語調で言ったとしてもそれは伝達者のものと思われる。このことから(4)と(5)がsynonymousでないことがわかる (cf. Li, 1986)。
- 8) 学習英文法では、伝統的に直接話法にはsayを用い、間接話法にはtellを用いるよう指導しているが、特に書き言葉ではtellも直接話法伝達部に普通に現れ、伝達内容だけでなく被伝達者をも重視した文脈ではむしろsayよりもtellの方がふさわしいことも多い。学校などの指導現場で、直接話法におけるtellを誤りと指導しているとすれば、それは行き過ぎといわざるを得ないであろう。
- 9) このgoは、いわゆる擬声語などを導く用法。俗語ではsayと同様の機能を果たす用法もある。cf.井上 (1984)
- 10) 本来は“...do they move less and less rapidly”となるわけであるが、文の終わりに近づくと繰り返される文字の数が多くなっていっていることに注意。
- 11) 一連の談話を伝達する働きを持つものを「談話連結詞 (discourse connective)」と想定すれば、直接話法伝達部が文法的にも意味的にも文の中で周辺的存在であるのに対して、間接話法伝達部は文の中に統合された存在であるということになる。その間には段階性があり、伝達部の生起位置はその指標の一つである。詳しくは井上(1986b)参照。また、Givón (1980), Munro (1982), Haiman & Thompson (1984), Quirk *et al.* (1985: 1022-24), Li (1986) などでも直接話法伝達部と直接引用部との融合度の問題が取り上げられている。下のa~iはQuirk *et al.* (1985) が伝達部の生起位置とその文に対する統合度の段階性の関係について指摘した内容に、加筆修正して例を示したものである：

<integrated>

- ↑ a. John said that there was no money.
b. There was no money, John said.
c. John said that he had “no money”

because he had spent all.

- d. John said, “There is no money.”
e. “There is no money,” John said.
f. “There is no money,” said John.
g. “There,” John said, “is no money.”
h. “There,” said John, “is no money.”
↓ i. “There is no money.”

<peripheral>

- 12) あげてある動詞は井上 (1986a) を修正の上、簡略化したもの。問題の性質上、必ずしも単一の機能の項目だけに属さず複数の機能の項目に属する動詞もある。伝達部における副詞の役割については改めて2.3.2で取り上げる。
- 13) 内田 (1979) でも’say + α’ という言い方が用いられている。
- 14) Sadock (1969: 323) は、このように意味を持たずただ音声だけを記述した直接引用部のことを“non-significant quotation”と呼んでいる。
- 15) 細かくみると音声描写は次のような分類も可能である (cf. Knowles, 1987: 219-20) :
- a. <loudness> : bellow, murmur, mutter, roar, shout, thunder, etc.
b. <pitch> : cry, scream, shriek, screech, etc.
c. <tempo> : drawl, snap, etc.
d. <voice quality> : breathe, croak, gasp, murmur, purr, whisper, etc.
e. <vocal gestures> : belch, giggle, laugh, sob, etc.

Knowlesは特にhigh pitched vowelsである/i:/, /i/の頻度の多さに言及しているが、閉鎖音と摩擦音の多さは注目に値する。また、特に/s/で始まるものが多いことにも驚かされる。音声描写を表す動詞は擬声語が中心となるため、耳に残る音が使われ易いためであろう。試みに手許の82の動詞を検討してみると〔小数点以下は切捨て〕、

閉鎖音を含むもの：67 (81%)
閉鎖音で始まるもの：35 (42%)
摩擦音を含むもの：36 (43%)

{whimper, whine, whisper, whoopなどの/h/は除いてある}

摩擦音で始まるもの：27 (32%)
/s/で始まるもの：19 (23%)

となり、閉鎖音と摩擦音で始まるものを合わせると、全体の75%にもなる。なお、本文に示したものの以外の動詞を参考のために挙げておく：chuckle, coo,

croak, crow, cry (out), drawl, drone, exclaim, explode, falter, gasp, giggle, go, grate, grind out, grit, groan, growl, grumble, grunt, gulp, gurgle, hiss, holler, howl, huff, intone, keen, laugh, lisp, mimic, moan, murmur, mutter, pant, pound, puff, purr, rap out, rasp, rave, roar, scream, screech, shout, shriek, sigh, sing out, singsong, snarl, snicker, sniff, sniffle, snigger, snort, sob, speak up, spit, squeak, stammer (out), storm, stumble (on), stutter, thunder, wail, whimper, whine, whisper, whoop, yell, yelp, etc.

- 16) cf. 注 11)
- 17) 概して、伝達動詞本来の「伝達」の機能から遠くなるにつれて、言い換えると、直接話法伝達部の持つ 'say + α ' という機能のうち、' α ' の機能の割合が大きくなればなるほど、伝達部の文中における生起位置の制限が多くなる。cf. 井上 (1986 b)
- 18) その多様性は意味的・機能的な面にとどまらず、統語的な面にも及んでいる。次の例では直接話法伝達部の談話連結詞的性格 (cf. 注11) がよく現われている：
- "Now, Liv," *objected Uncle Jack*, "I'm sure we don't know what you mean by that, and — well, here we are at Halfway House," *he turned in then at a large broad drive leading up to a luxury road house*, "and now for a drink, eh girls?" *he added cheerfully*. — Terry Southern & Mason Hofenberg, *Candy*
- 19) 伝達部が副詞類のみで構成される場合、「話者+伝達動詞」が省略されたものとする分析も可能だが、伝達部が直接引用部に対して周辺性を高めた形として理解するほうが利点が多い。cf. 注11)
- 20) 直接話法の伝達部が直接引用部中に挿入される際の効果について詳しくは井上 (1988) を参照。

〈引用文献〉

- Chafe, W. L. (1982) "Integration and Involvement in Speaking, Writing and Oral Literature," Tannen, D. (ed.) *Spoken and Written Language : Exploring Orality and Literacy*, pp. 35–44. Ablex Publishing Corp.
- Davidson, D. (1979) "Quotation," Davidson, D. (1984) *Inquiries into Truth and Interpretation*, pp. 79–92. Oxford University Press.
- Givón, T. (1989) "The Binding Hierarchy and the Typology of Complements," *Studies in Language*, 4.3, pp. 333–377.
- Haiman, J. & S.A. Thompson (1984) "Subordination' in Universal Grammar," *Proceedings from the 10th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*.
- 井上永幸 (1984) 「伝達動詞としての go」『英語教育』1984年7月号, pp. 92–93. (大修館書店)
- (1985) "Discourse-Orientedness of Direct Speech and Coherence of Direct Quotes," *Studies in English Linguistics & Literature* 2, pp. 68–81. (京都外国語大学英米語学科研究会)
- (1986 a) 「直接話法伝達部の意味と機能」『白馬夏季言語学会論文集』創刊号, pp. 17–30.
- (1986 b) "On Transitivity and Adverbiality of the Reporting Clauses in Direct Speech," *Kansai Linguistic Society* 6, pp. 105–116.
- (1988) 「挿入節としての直接話法伝達部」『現代の言語研究』(六甲英語学研究会編)金星堂, pp. 275–286.
- Knowles, G. (1987) *Patterns of Spoken English: An Introduction to English Phonetics*. Longman.
- Leech, G. N. (1980) *Explorations in Semantics and Pragmatics*. Pragmatics & Beyond 5. John Benjamins B. V.
- , M. Deuchar & R. Hoogenraad (1982) *English Grammar for Today*. Macmillan.
- Li, C. N. (1986) "Direct Speech and Indirect Speech: A Functional Study," F. Coulmas (ed.) *Trends in Linguistics: Direct and Indirect Speech (Studies and Monographs* 31), pp. 29–45. Mouton de Gruyter.
- Munro, P. (1982) "On the Transitivity of 'Say' Verbs," Hopper & Thompson (eds.) *Syntax and Semantics 15: Studies in Transitivity*, pp. 301–318. Academic Press.
- 岡田伸夫 (1982) 「直接話法と間接話法」『京都教育大学紀要』Ser. A, 60, pp. 173–192.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Sadock, J. M. (1969) "Hypersentences," *Papers in Linguistics* 1, pp. 283–370.
- 内田聖二 (1979) 「直接話法と伝達動詞」『語法研究と英

語教育』創刊号, pp. 22-34. 山口書店.

Wierzbicka, A. (1974) "The Semantics of Direct and Indirect Discourse," *Papers in Linguistics*, 7 : 3/4, pp. 267-307.

〈引用作品〉

Don, Ian (1984) *Splash*. W. H. Allen & Co.

Feynman, Richard P. (1985) "*Surely You're Joking, Mr. Feynman!*" Bantam Books.

Krentz, Jayne Ann (1984) *Uneasy Alliance*. Harlequin Books.

Shaffer, Peter (1980) *Amadeus*. A Signet Book.

Southern, Terry & Mason Hoffenberg (1983) *Candy*. Dell/Putnam Book.

Spencer, Lavyrle (1984) *Spring Fancy*. Harlequin Books.

Turner, Lynn (1984) *For Now, For Always*. Harlequin Books.

Reader's Digest. [RD]